

水戸黄門の退場

テレビドラマの「水戸黄門」が、今日（12月19日）の放送を最後に、表舞台から姿を消すことになりました。

時代劇ファンとしては、誠に寂しいかぎりです。

「水戸黄門」の放送が始まったのは、1969年といいますから、今から42年前のことになります。初代の黄門様は、東野英治郎さん、以下、西村 晃さん、佐野浅夫さん、石坂浩二さん、そして里見浩太朗さんと続きます。里見黄門様でさえ、既に9年ですから長くなりましたが、これも視聴者の支持があったればこそといえましょう。

歴代の黄門様で印象が深いのは、何ととっても東野英治郎さんの黄門様です。特に、東野黄門様が、最後に「かっかっか」と笑うと全てが丸く納まるという感じでした。国民的人気も凄いもので、最高視聴率が43.7%というのは驚きです。ですから、東野さんの後に続く方は、大変だったと思います。2代目の西村黄門さまは、格さん役の伊吹五郎さんに「俺等になって視聴率が下がっては具合が悪い。俺は西村黄門でいく」と語ったという事ですが、笑い方でも、東野黄門様は「かっかっか」ですが、西村黄門様は「ほっほっはっは」と工夫しているように、歴代の黄門様は、東野さんに習い、そして東野さんを超えようと、演じてこられたのだと思います。

テレビドラマ「水戸黄門」は、何故かくも日本人に受け入れられてきたのでしょうか。

歴代の黄門様は42年間にわたり、ひたすら悪人達を懲らしめてきましたが、内容はほとんどパターン化していて、終盤で格さんが「これが目に入らぬか」と印籠を示すと、何と悪逆非道な悪人どもが「ははー」と恐れ入って平伏するという、実に単純明快な「勧善懲悪」の物語となっています。

視聴者の皆さんは、真面目に一生懸命に働いているのに悪代官や強欲な金貸し、商人達からひどい目にあっている、そうした権力者に虐げられている庶民の姿と自分とを重ね合わせて見ているのだと思います。

どんな時でも、最後は黄門様が来て悪人を懲らしめてくれるというようなこ

とは、現実には有り得ませんし、そんなことは誰しも分かっていますが、でも、どこかにそんな事を期待している自分がある。「水戸黄門」は、そうした自分の思いを形にしてくれているという共感を、見る人に与えてきたのではないかと思います。

「水戸黄門」のもう一つの特徴は、地域密着型という事でしょうか。黄門様は、ドラマの中では全国を行脚していますが、必ず舞台となっている地域の名物や伝統技術、芸能などを紹介してきました。それはそれで、結構勉強になったものです。

また、正直に生きること、弱いものを虐めてはならないこと、更には、親には孝行を尽くせとか、夫婦仲良く等々、人として生きていく上での理想について語り続けてきたことは、貴重なことです。それは、日本人の心の琴線に触れる部分であり、忘れてはならないことでもあります。

「水戸黄門」が終わりを迎える一方、ケーブルテレビの「時代劇チャンネル」などでは、様々な時代劇が流されており好評です。私が時代劇に引かれるのは、単なる郷愁ではなく、人生の機微や人情、人間としての美学など、日本人の精神構造とも深く関わっているように思うからです。

「水戸黄門」がテレビの表舞台から去るということになりますと、地上波テレビのレギュラー番組はNHKの大河ドラマだけということになります。これは、時代劇を作り上げていく技術伝承の場がまた一つなくなるという事でもありますので、黄門様には、時代劇という日本の貴重な映像文化が衰退していくことのないよう、いつか不死鳥のように蘇って欲しいものだと、心密かに祈っています。（塾頭 吉田 洋一）